

2014 年度秋季
大阪大学 言語社会学会・言語文化学会合同研究発表会
(大阪大学 言語文化学会 第 46 回大会)

2014 年 10 月 23 日 於 大阪大学 豊中キャンパス

発表要旨

第 1 室 (B 棟 1 階 大会議室)

外国語学習の継続に影響を及ぼす要因
—韓国語学習者の学習への解釈を中心に—

金 孝善 (言語文化専攻博士後期課程 1 年)

本研究は韓国語を学習する成人学習者を対象に、彼らのライフヒストリーに注目し、そこから学習継続システムを明らかにすることを目的とする。そのため、韓国語学習者の学習への継続意志を検証する予備調査を行った上で、長期間韓国語学習に取り組む成人学習者を対象にライフストーリー・インタビューを実施し、継続的な韓国語学習の要因を調べた。予備調査の結果では、韓国語学習者は韓流ブームからの影響を大きな動機とし、学習への継続に強い意思を持っていることが確認された。4 名の成人学習者を対象に行なったインタビューの結果では、学習者の「社会的環境」「他者との関わり」「学習への解釈」「欲求」「行動」の 5 つの要因が見つけれられ、これらの要因は学習過程の中でお互いに相互作用しながら韓国語学習の継続に影響していることが明らかになった。

本発表では本研究で明らかになった 5 つの要因の中で「学習への解釈」を中心に発表する。鹿毛(2004)は、学習者の状況とそれに対する意味付けや価値付けが学習に大きく影響する要因であると述べたが、インタビューの結果からも、学習者は学習行動による学習と生活の量側面で心理的な満足感を得て、生活や人生を楽しむための 1 つの道具として認識していることが分かった。今回は学習者の全学習過程を通じた学習への解釈に関わるインタビューデータを示して報告するが、この報告によってこれまで知られていなかった韓国語学習者の学習による生活への影響と学習の継続過程を具体的に把握することができると思う。

日本人大学生の韓国語優秀学習者の研究
—発表能力優秀学習者の学習ストラテジーを中心に—

白 姫恩 (言語文化専攻博士前期課程 2 年)

これまでの多くの研究者は、同一の教授法と方法論で指導を受けるにもかかわらず学習者に差が生じることに注目し、これを究明するため成功的に言語を学習した事例を研究した(オム 2007)。しかし、成功した学習者の特徴に関する研究は韓国語教育で今まではほとん

どなされていないと金(2008:v)は指摘する。特に、聞くこと・読むこと・書くことに比べ、「話すこと」の過程で学習者が使用する学習ストラテジーの研究はほとんど行われていないとク(2001)と孫(2013)は主張する。予備調査を行った結果、発表能力優秀学習者 2 人とも、韓国語を勉強する際に、もっとも上手になりたい・身につけたいのは「話すこと(会話を含む)」だと答えた。韓国語学習者にとっての「話すこと」は非常に重要であると考えられる。「話すこと」の種類は、大きく発表と討議・討論に分かれている(金 2012)。その中でも、学習者中心の教育に教育方向も変化している現状の中では、「発表」の比重が大きくなっており、発表は学習者が難しく感じる分野としても高い比率を示している(李 2003:金 2011)。そこで、本発表では、「話すこと」の中でも「発表」に注目した。そして、優秀な成果を見せた、いわゆる成功者と呼ばれる学習者に対するはっきりした定義は存在しなかった(ペ 2012)ため、韓国語弁論大会という公的の場で、優秀な成績を残した者を「発表能力優秀学習者」とし、研究を行った。本調査の結果、以下の点が明らかになった。(1) 韓国人の友人と交流する機会を自ら作り、自然にネイティブ・スピーカーと接するようになった。(2) 韓国文化に非常に興味を持っていた。(3) 発表能力向上のため、自分モニターを積極的に行った。なお、本研究は、日本における発表能力優秀学習者の学習ストラテジー研究の一部として行ったものである。

1920年代前半のメイエルホリド作品における空間処理

池坂 麻記 (言語社会専攻博士後期課程3年)

これまでメイエルホリドの『曙』(1920)『大地は逆立つ』(1923)『リューリ湖』(1924)『ブブス先生』(1925)がどのような上演だったのか調べたので、それがどのように大成功とされる『委任状』(1925)に繋がったのかをまとめたい。今回は当該作品におけるメイエルホリドの空間処理に視点を当てたい。メイエルホリドは音に敏感で、革命前のチェーホフとの書簡からも、戯曲から音楽を聞き取る能力を発揮しており、特に『ブブス先生』では音楽を入念に準備し、『曙』『大地は逆立つ』では終盤の葬儀シーンでの音響効果に重きを置いていた。音楽や音響効果は時間の経過であるが、その経過を包括する「場」としての空間という意味で、西田幾多郎やベルクソンの主客を分けない「私」と「世界」は一体化しているという世界観と、舞台と観客を一体化させようとしたメイエルホリドの手法と合致する。一方で、メロドラマのタブローという静止場面を繋ぎ合わせる手法は瞬間、瞬間を切り取っており、それはできないといったベルクソンや西田幾多郎の純粹経験のような考えとは相容れない。だが、「私が」という主語ではなく、西田幾多郎の「述語論理」は、精神分裂病患者に見られる話し方で、そうした人々の語られなかった言葉は、メイエルホリドが革命前から取り上げて来た無意識の世界の言葉である。それは主客転倒と並んでバフチンの解放の笑いとも共通する。この点では、メイエルホリドの笑いは、ルナチャルスキーが推奨したこともあり、人民を教育する為の矯正の嘲笑、攻撃の笑いだった。それはバフチンの解放との笑いとは相反し、ベルクソン的な笑いである。解放の笑いは、高位の者を笑いよって低位に引きずりおろすという「場」の話で空間的である。今迄方法論がなかったので、空間という面からまとめたい。

アメリカ帝国主義と日本開港

藤原 郁郎（言語社会専攻博士後期課程3年）

19世紀前半のアメリカにおいては帝国主義（Imperialism）という語は肯定的な意味で使われていた。つまり、カリブ海・中南米・フィリピンにおけるスペイン帝国主義に対峙し、またイギリス帝国主義のインド・中国への拡大を追うものとして「国力増大」と同義語であった。東アジアに対しては、1793年に初めてアメリカ商船が中国広州に入港しているが、これはイギリス・フランス・オランダなどの商船に追随することで行なわれた。その後もイギリスの中国アヘン貿易に参加することで貿易ネットワークに参画した。これに対し日本への開港要求では、イギリス追随型ではなくアメリカがほぼ独自に行なったことは強調されなければならない。19世紀半ば、太平洋におけるアメリカ捕鯨業はイギリス捕鯨業を大きく引き離し世界最大の捕鯨国となっていたが、西海岸は工業的に発展しておらず捕鯨業に対する政府の保護がスワード上院議員（後の国務長官）などを中心に熱心に求められていた。ビッドル、モリソンなどの先例を詳細に検討したペリーは、アメリカの交易の場として日本の開港を求めた。捕鯨業が大西洋において乱獲のために廃業に追いやられたことを考えれば、太平洋での英・米・仏などの乱獲による資源の枯渇は明瞭であったのであり、日本開港の際の捕鯨業の役割は名目的であった。杉浦の研究により、19世紀の中国貿易ネットワークが東アジアで圧倒的であり日本は開港後も微々たる位置を有していたに過ぎないことが明らかにされつつある。日本開港は、アメリカの競合・強調型帝国主義ではなく単独帝国主義によるものであったと結論付ける。これ以降、アメリカは太平洋における単独帝国主義をハワイ、フィリピンにおいて成功させており、日本開港の成果をこの歴史的な脈に位置づける。

第2室（A棟2階 大会議室）

権力者のジレンマ

—The Sirens of Titan における“Author”の崩壊—

三宅 一平（言語社会専攻博士前期課程2年）

カート・ヴォネガットに因る『タイタンの妖女』（1959）では、太陽からベテルギウスの間の時空間上に波動現象として存在し、その範囲内での全知の視点を手にしたウィンストン・ナイルス・ラムファードという人物が現れ、その知識をもって地球をコントロールしようとする様が描かれる。しかし全てを掌握していると信じていた彼自身もまた、トラルフアマドール星という彼の存在範囲外からの影響に支配されていた、という悲劇が物語の一種のハイライトとなっている。ここで見られる自由意志の問題は、この作品のみならずヴォネガットの作品の多くで取り上げられる彼の中心的テーマでもある。本発表ではこの自由意志の問題が、本作でいかに描かれているのかというレトリックの観点から論を展開する。上述のラムファードの悲劇を例にとるならば、常に権力者は不可知、不可触の力からの影響に対する不安から解放されることはない。自由意志に基づいての行動のはずが、そう意図するようにコントロールされているかもしれないという脅威は、その力が不可知である限りにおいて否定不可能な物となるのである。また、こうした支配／被支配の関係

は、ヴォネガットの特徴的な手法である語り手の存在する次元の曖昧さや、作者と作品との距離の崩壊からも論じられる。語り手は基本的に全知の第三者的視点で物語を語るが、時に作中世界との直接的繋がりを仄めかし、語り手、語られ手の間にあるはずの距離を奪い去る。さらに物語の枠組みを離れた書誌の項に書き込まれた註釈は、作品と現実との境を朧にする。以上の考察を通して、権力の不安定性から「著者／神」という意味を持つ“Author”の崩壊を提示し、作品のプロット、レトリックが、単純な三角形で表しきることのできない、歪なヒエラルキーの様をいかに描写しているかを明らかにしたい。

In the Country of Last Things における熱的死と弔い

高田 勇介（言語社会専攻博士前期課程1年）

Paul Auster の In the Country of Last Things (1987) のディストピア社会では、死体や廃棄物を燃やすパワープラント、極端な寒さや暑さ、焼失する国立図書館など「熱」を連想させる描写が多く見られる。閉ざされた社会ではあらゆる秩序構造は最大の無秩序(熱的死)に向かい非可逆過程が進行するという、熱力学のエントロピーの概念を応用したマンフレート・ヴェールケの社会学のテーゼは本作で応用可能である。ディストピア社会を彷徨う中で主人公の Anna は老夫婦のアパート、同郷の Sam との生活、Woburn House での生活を経験するがそういった複数の閉ざされた小さな共同体は外部からのエネルギー供給がないためそのシステムが崩壊する。またエネルギーのエントロピー過程は共同体のみならず、気温、Anna や Sam の書くテキスト、性や愛を巡る問題においても見られる。

その一方、エントロピー的な衰退や消失・死が継続する本作においては、人々が死や消失と如何に対峙するかという弔いの問題が浮上する。Otto の葬儀において Woburn House の人々は小石による墓標を造り、弔いの詩を吟じるが、Otto 自身の口から発せられる言葉が石と喩えられるように、石そして言語は生者を死の領域から遠ざける障壁となり、弔いのアポリアを浮き彫りにする。一方で住居であった図書館の全焼により離散し、お互いの消息を完全に断たれた Sam と Anna は互いにパートナーの死を受け入れようとし、また自分が逝き遅れた者としての運命を受け入れ互いが同時に弔いの主体かつ客体となる。都市に自らを埋没させることによって死に最接近した二人は互いを死の極致で待ち、死に差し迫るというデリダが示すような不可能なものを経験としてのアポリアを疑似的に提示することによって再会を果たす。

閉鎖された社会を描く本作は Anna の手紙がディストピアの外に届くという結末を持つ。テキストが外部に開かれることによって作品内のエントロピーは現実社会に伝染し、本作の受容や上書きを通して弔いが再現されるのである。

明治漢文怪異小説における画霊譚の展開について

聶 晶（言語文化専攻博士後期課程2年）

画霊とは、画や彫刻や屏風など、人が心を込めて作成した物の中には、魂や霊が宿ったものの総称である。これについての物語は、古今和漢の記録に多く記載されている。明治二十二年（1889）に出版された漢文小説の『夜窓鬼談』の中にも、一編の画霊譚がある。

それは、上巻 17 編の「画美人」という作品であり、日本人の書生が清国の美人画から出てきた女性との恋愛を描いた物語である。また、中国の唐以来の伝奇小説と怪異小説において、『松窓雑記』[作者は唐の杜荀鶴 (846~907?)、明の業書の『説郛』の 46 巻に収録され、刊行年は不詳。]には、主人公が美人画の中の女を呼び出し、自分と結婚して子供も産んだという話があり、怪談随筆集の『夷堅志補』の巻十[作者は宋の洪邁 (1123~1202)、1198 年に成立した。]には、書生が美人画の中の女との縁を結び、その後別れてしまうが、彼女の予言によって彼女の顔とそっくりな女性と結婚したという物語が書かれている。また、随筆の『輟耕録』[作者は元・明間の陶宗儀 (1329~1410)、日本では 1652 年に刊行された。]、明曲の『牡丹亭』[作者は、明の湯顯祖 (1550~1616)、1598 年に成立した。]、怪異小説集の『聊齋志異』[作者は清の蒲松齡 (1640~1715)、成立年代は不詳。]などの作品中にも、画中の美人との恋物語が記述されている。

一方、日本の近世怪異譚の中にも画霊についての話がある。例えば、随筆の『落栗物語』[作者は松井成教、江戸後期に成立した。]の前編に、人物画に画家の執念が乗り移り、怪異が起こるという話があり、怪談集の『伽婢子』[作者は浅井了意 (1612~1691)、1661 年に刊行された。]の「屏風の絵人形」という編には、時の室町幕府管領の細川右京大夫政元が、寝ている時に、枕元にある屏風の絵に描かれている人物が飛び出し、楽しげに踊っているという話が記されている。そのほか、『御伽百物語』[作者は青木鷺水 (江戸前中期)、1706 年に出版された。]巻四の「絵の婦人に契る」という編の中にも、書生と画中の女と恋愛したプロットがみえる。それでは、『夜窓鬼談』中の「画美人」は、これらの類話との間にどのような共通点と相違点があるのか。更にこの一類の物語には、どのような成立の背景があるのか。これらの疑問を解明するために、本発表は作品の内容と創作特徴などの方面から比較・分析することを行い、その源流、成立の時代背景を明らかにしようとする。

第二言語学習場面における談話による小学生のアイデンティティ構築

泉谷 律子 (言語文化専攻博士後期課程 1 年)

子供たちの日常世界では、他の文化というものがリアリティをもって迫ってこない。まわりが皆日本人であり、日本人としてのアイデンティティも、日常生活における行動の規範もことさらに意識する必要がない。さらに、テレビの影響で、異国や外国人は映像で手軽にみられるエンターテインメントにとどまりがちである。このように漠然ともっている偏った異文化の知識は、第二言語学習の中でどのようにすればリアリティをもって理解されるのか。Bamberg, et al(2011)はアイデンティティは日常生活の絶え間ない実践に能動的にかかわることによって構築されていくものだとして述べる。それでは、第二言語学習場面の談話の中で、アイデンティティの構築はどのようになされるのか。

従来の第二言語学習における教室談話の研究は、英語の非母語話者が英語を話すときの現象しかとりあげていない。非母語話者が英語を学習しながら、その文化について英語と母語を交替しながら話したり、母語で話すということは教室でも多いと思われるが、それは対象となっていない。

本発表では、英語教室での学習における談話の中で、小学 5 年生女子二人が、「家に入るときは靴を脱ぐ」「エコハウス」という特定のトピックを巡ってどのようなカテゴリーを成させ、第三者としての他者から自分(個人もしくは集団)を区別しているかを見ること

によって、談話の中での社会的アイデンティティ構築のプロセスを明らかにする。

第3室 (A棟3階 講義室)

状況確認発話とその応答に見られる発話の音調パターンと機能について —親しい女子学生同士の電話会話の場合—

甲斐 朋子 (言語文化専攻博士後期課程3年)

電話会話の構造と構成要素について日本語と英語等を比較した研究は多いが、それらの構成要素の音調について調べた研究は少ない。本研究では、これまで音声研究の領域で分析されてきた日本語(東京語)の文末音調に関する研究成果を基に、電話会話の開始部に見られる「今、大丈夫？」等の相手の状況確認のための発話とその応答発話に着目し、音声分析ソフトを使って音調パターンを調べた。分析対象データはBTSJコーパスの電話会話39件で、電話のかけ手が親しい同級生、後輩、先輩に依頼を行い、受け手がそれを断るというものである。電話の開始部で相手の状況確認が行われた事例は22件で、このうち丁寧体の「ですか」がついたもの(4件)、「今、平気？」等の他の表現例(2件)を除いた16件を分析対象とした。分析の結果、14件の「(今、)大丈夫？」の文末が郡(2003、2014)の分類の疑問型上昇調で発話され、残りの2件は疑問型上昇調でも強調型上昇調でもない文末音調であった。応答の「うん」では、須藤(2007)による情報の入力に対する肯定的な結果表示の機能を持つ音調が見られ、「大丈夫(です)」は郡(2014)で提唱されている無音調で発話されていた。また、「大丈夫、大丈夫」という受け手の応答発話については、かけ手が再確認を行うか否かには、音調の違いも関与していることが示唆された。緩やかな下降による「大丈夫、大丈夫」の発話は、後に「ほんとに？」というかけ手からの確認発話が続いていた(1件)。一方、発話末に向けて急下降していく「大丈夫、大丈夫」の発話(3件)は、かけ手からの再確認に対し、間違いがないことを強調している印象を与える音声であった。この発話に後接するかけ手の発話が次の話題に移っていることから、上記の状況においては急下降の「大丈夫、大丈夫」の音調が「主張を強調する」という機能として使用されていると考えられる。

“.....(, /。) 这/那就是 [注解]” と “.....(, /。) 就是 [注解]” —現代中国語の注解表現における文脈指示詞の有無—

小野 絵理 (言語社会専攻博士後期課程2年)

現代中国語における注解表現に、先に述べたことを指示詞で指してから注解を行う、“.....(, /。)这/那就是 [注解]”という表現方法がある。下の(例1)は指示詞“这”が用いられている例であり、(例2)は指示詞“那”が用いられている例である。

(例1) 革新与守旧同时举行, 这就是他对近代史的大贡献。(革新することと旧習を守ることが同時に行ったこと、これが彼の近代史への大きな貢献である。)

[北京大学中国语言学研究中心の“現代漢語”コーパス (以下 CCLM) (日本語訳筆者、以下同じ)]

(例 2) 在中国, 对现代性的研究还有一个实用性的目的, 那就是通过研究现代性以促进中国的现代化进程。(中国では、現代性の研究にはもう一つの実用的な目的がある。それは現代性の研究をとして中国の現代化の過程を促進することである。) [CCLM]

一方、(例 3)や(例 4)のように、指示詞を用いない“.....(, /。)就是 [注解] ”という表現もある。

(例 3) 所谓教育目的, 就是指社会对教育所要造就的社会个体的质量规格的总的设想或规定。(いわゆる教育の目的とは、社会が教育に作り出してもらいたい社会個体の質的規格のまとまった想定あるいは規定を指すのである。) [CCLM]

(例 4) 这种预期的结果或理想的形象, 就是我们所说的教育目的。(こういった予期の結果あるいは理想の形が、我々の言うところの教育の目的である。) [CCLM]

本発表では、現代中国語の注解表現において、文脈指示詞を用いる場合“.....(, /。)这/那就是 [注解] ”と、文脈指示詞を用いない場合“.....(, /。)就是 [注解] ”とでは、前後の形式や論理関係にどのような違いがあるのかについて考察する。

中国語の新語における「三音節名詞」の構造と意味

袁 晓今 (言語社会専攻博士後期課程 3年)

中国語は対を良しとし偶を尊ぶ。よって、安定性を求め、古代の単音節言語から現代の二音節言語へ変化してきた。しかし、近年、新語を始め、三音節語の台頭が顕著に見られる。また、三音節新語のうち、9割近くが名詞である。本研究は社会言語学の角度からではなく、語構造と語彙意味論を理論の枠組みとする新語に関する研究である。具体的に、本研究では、2006年から2012年までの7年間に使われ出した新語の中から三音節名詞1,170語を抽出し、研究対象とする。計量分析を通して、「2+1」型と「1+2」型の2大タイプの語構造と意味構造の特徴について考察する。語構造の考察に関しては、構造上の特徴を指摘した上で、語形成能力の高い形態素と造語モデルを導く。意味構造の考察に関しては、生成語彙論の中の「クオリア構造」の考え方を取り入れ、語彙分解をし、新しい意味の生成の過程を説明する。以上の考察を踏まえ、新語の三音節名詞と、《現代漢語常用詞表》から収集した常用三音節名詞約4,800語との間で語構造、意味構造の対照を行う。その結果、三音節名詞においては、新語が恣意的に作られているように見えるが、語構造においても、意味構造においても常用語と類似していて、「それなり」に規則に則っていることが分かった。しかし、(1) 新語では、単音節語基が担う意味情報は常用語の場合より多い。(2) 新語では、常用語と同じ字形を使っている語基が新たな語義を誕生させるケースがある。この2点が観察された。

現代ピクトグラム評価方法の中国古代文字（甲骨文・金文）への適用について

Vinogradova Daria（言語文化専攻博士後期課程3年）

現代社会では、文字言語に代わって使われる様々なピクトグラムの使用頻度が高くなった。電子メールの絵文字、パソコンのアイコン、公共案内用図記号など、日常的に使われているビジュアル記号の種類及び使用範囲は幅広い。国際視覚言語の役割を果たす現代ピクトグラムは、専門的な知識に基づき作成し標準化されているものであるけれども、古代から使われている記号とでは発想上及び表現手法上の類似性が見られる例も数多い。

本発表では、現代ピクトグラムの標準及び評価方法を古代ピクトグラムの一つである中国古代文字（甲骨文・金文）へ適用し、その象形性及びビジュアル明確さを評価したい。中国古代文字は、現代の人が学習なしに理解できるかどうかを明らかにするには、国際標準化機構（International Organization for Standardization）が開発した公共案内用図記号の評価方法を中国の古代文字に適用し、その中では象形性の最も高い文字が現代の公共案内用図記号の規格条件を満たすがどうかを考察したい。そのために、およそ100人の日本人及び100人の外国人を対象に三段階のテスト調査を行い、中国古代文字の理解度または認知度を評価して見た。第一の段階では、古代文字を古い字形で、第二の段階では、構成要素の説明を導入し、第三の段階では、古代文字の構成要素をそれに相当する現代記号に取り替え、いわゆるビジュアル翻訳をし、文字の意味を推測させた。本発表では、調査結果を紹介し、考察したいと思う。

第4室（A棟3階 第1演習室）

「天声人語」コラム、「どうにかなるさ」を日本語話者はどう評価するか

笹川 恵美子（言語文化専攻博士後期課程3年）

本研究は朝日新聞掲載のコラム「天声人語」に対する日本語話者の評価について考察を行ったものである。「天声人語 Vox Populi, Vox Dei 1979年秋号」（原書房刊）掲載のコラム「どうにかなるさ」を材料に、2013年10月より2014年3月末にかけ、成人日本語話者21人を対象にコラムの文章構成、執筆者の主張の仕方や態度、文章の書き方についてアンケート調査を行った。調査協力者には、文章構成に対してはUnity, Focus, Coherenceの3点を各々5段階で評価し、執筆者の主張や態度については自由なコメントを記述するよう依頼した。その結果、全体的に高い評価を与えた調査協力者は全体の約24%で、半数近くの協力者が、「起承転結」に則ったコラムの文章構成を低く評価すると共に、執筆者の主張の弱さや、執筆の態度、文章の書き方に違和感を覚えるというコメントをしている。

Hinds (1982) は Contrastive Rhetoric の観点から、日本語のコラム Writing には英語の Writing では考えられない独特の Rhetoric が存在すると結論した。彼は数点の「天声人語」コラムを任意に抽出し、英語話者と日本語話者の双方に Unity, Focus, Coherence の3点から、その文章構成を評価する調査を実施した。なお、英語話者には編集室が作成する Asahi Evening News の英語翻訳版を使用している。その結果、日英両言語話者の評価には歴然とした差が存在するのが明らかとなった。Hinds は、「起承転結」の Rhetoric を用

いて書かれた「天声人語」のようなコラムは、日本語話者が総じて高い評価を与えるのに対し、英語話者には読解に多大な困難を伴うものであると結論している。加えて彼は、日本の主要な大衆紙に掲載されるコラムが、どうして日本語話者に積極的に高評価されるのか、その理由が分からないという疑問を呈した。

本調査はこうした Hinds (1982) の研究に考察を加えるものである。そのため、Hinds が調査の一環として文章構成の解説に使用した 1979 年度のコラム、「どうにかなるさ」を調査の材料とした。日本語話者の評価については Hinds の調査とは明らかに異なった結果を得ている。

死亡フラグが想起される表現の形式と意味・機能について — 俺...、この学会発表が無事終わったら、彼女と結婚するんだ...。 —

板垣 浩正 (言語文化専攻博士前期課程 1 年)

本発表の目的は、「死亡フラグ」に代表される「俺...、この戦争が終わったら、彼女と結婚するんだ...。」という表現(以下、「結婚構文」と呼ぶ)について形式と意味的機能に関する性質を、アンケート調査によるデータを中心に記述し明らかにすることである。「死亡フラグ」とは、ある人物の死を暗示、想起、また前触れとなる伏線を指す「ネット用語」・「オタク語」の一つである(オタク文化研究会 2006, 多根 2013)。死亡フラグのうち、言語表現として代表的なのが上記の結婚構文であるが、インターネット上ではこの形式を基盤に語彙を様々に入れ替えた表現が多く見つかるといえる。具体的にどのような形式と意味の柔軟性が存在しているのかに加え、そもそも多様な形式に対して実際に死亡フラグを想起できるかについて調査を行った。結果、死亡フラグが「息を引き取る」という字義通りの死亡に用いられているだけでなく、精神的苦痛や目標の未達成を暗示させる「比喩的」な死亡にも適用されていることが分かった。その一方で比喩的な死亡を想起させるための制約も存在している結果も得られた。また結婚構文内には、死亡を想起させるような語彙や表現が一切含まれておらず、個々の語彙を見るだけでは、死亡フラグの想起という意味は予測できない。このことから結婚構文には、この構文が独自に持つ形式と「推意」の対応関係が存在していることを示唆する(Goldberg 1995, Croft 2001)。さらに、死亡フラグの想起を前提として発話者が意図的に結婚構文を用いる場合があり、この際の結婚構文では聞き手に相反する意味を解釈・想起させる動機付けとして機能していることを示す。

近世期日朝対訳資料に現れた人称代名詞の研究 — 「隣語大方」を資料として —

金 文姫 (言語社会専攻博士後期課程 2 年)

本論文は、近世期に成立した日朝対訳資料のひとつである「隣語大方」を資料として、日本語および朝鮮語の人称代名詞の使われ方を、文末語尾の丁寧度との対応の観点から分析したものである。従来、日朝対訳資料に基づいた人称代名詞の研究は、もっぱら朝鮮の倭学訳官と日本人との対話を内容とする「捷解新語」を対象としておこなわれてきたが、

その他の諸資料についても順次検討を加えていく必要がある。本論文ではその一環として「隣語大方」を取り上げるが、資料の性格の違いによって、従来とは異なった方法で分析することとする。すなわち、「捷解新語」はストーリーを持つ連続した対話から成っているために、対話の場面や話し手・聞き手を容易に推測できる。よって、従来の研究は、該書のストーリーから特定される話し手・聞き手との関連から人称代名詞の分析をおこなってきた。しかしながら、「隣語大方」は断片的な文例を無秩序に羅列したものでストーリーがないため、それぞれの文例がだれが、だれに、どのような場面で言った言葉なのか、特定できないことが多い。よって、本論文では、話し手・聞き手との関連から人称代名詞を見ることを放棄し、テキストの他の部分、すなわち、文末語尾の丁寧度との関連から分析を試みた。日本語・朝鮮語ともに、人称代名詞と文末語尾の丁寧度との間に相関関係が観察されるが、日本語に比して朝鮮語の人称代名詞の各語はカバーする文末語尾の丁寧度が広いことを報告したいと思う。